

論文要旨

無侵襲的出生前遺伝学的検査 (Noninvasive prenatal testing; NIPT) を受けた妊婦の産後メンタルストレスに対する認定遺伝カウンセラーの役割

武田 (岡崎) 恵利

妊娠・出産は、女性の心理状態に影響を与え、産褥（じょく）期にはうつ病に伴う抑うつや不安などの精神障害が起こりやすい。産褥期の精神障害として様々な病型があるが、その中でも「産後うつ病」は最も頻度の高い病型であり、その割合は9.0%を占めている。「産後うつ病」は、産後1カ月頃にうつ状態が2週間以上持続する状態であり、リスク因子として、妊娠中の不安、高年妊娠、初産、多胎、妊娠前からの精神疾患の既往、親密なパートナーからの暴力、社会的サポートの欠如などが挙げられている。早期発見および治療とサポートにより、本人のみならずその児や家族への好ましくない影響を予防できる可能性があるとされている。無治療の産後うつ病は、本人だけでなく、本人の養育能力の低下や児の虐待につながり、母子の愛着に影響を及ぼすこと、また児の精神発達障害との関連が明らかとなっている。また、妊産婦死亡への影響も否定できず、東京23区内の妊産婦の異状死実態調査（2005-2014年）によると、妊娠中から産後1年までの間に63人の女性が自殺していたことが明らかとなっており、自殺の原因は産後うつ病が最も多かった。この自殺の割合は出生10万人中8.7人を占めており、平成27年度の妊産婦死亡率が出生10万人中3.8人であることを考えると、産後うつ病は妊産婦の死亡原因に最も大きく影響している因子である可能性が示唆される。このように、産後うつ病がもたらす影響は大きな社会問題につながるため、早期発見・早期治療の重要性が指摘されており、周産期メンタルヘルスの重要性が強調されている。一方、我が国における周産期動向として、高年妊娠や生殖補助医療（ART）での妊娠の増加にともない、出生前検査を受ける人の割合も増加している。2013年に無侵襲的出生前遺伝学的検査（Noninvasive prenatal genetic testing; NIPT）が臨床研究として導入される際に、出生前検査に関する様々な報道が行われたことにより、日本社会における出生前検査への関心が高まり、出生前検査を受ける人の割合はさらに増加している。先行研究において、NIPTをうけた妊婦では、非実施群と比較して抑うつや不安が高い傾向があることが報告されている。この結果は、NIPTをうけた妊婦は産後うつ病を引き起こしやすい要因を持っていることを示唆している。しかしながら、これまでNIPTをうけた妊婦の産後について調査された報告はない。そこで本学位論文では、NIPTをうけた妊婦の産後メンタルストレスについて調査し、「NIPTを受けた妊婦の産後メンタルストレスに対する認定遺伝カウンセラーの役割」について考察をした。

NIPTを受検希望したカップルの医学的・心理学的な背景を明らかとするために、日本の人口動態統計データと比較し、統計学的に検討を行った。その結果、NIPTを受けたカップルは、妊婦が年長である割合が多く、妊婦の結婚年齢、初産年齢が高く、結婚から初産までの期間が長い傾向があることがわかった。また、ARTを利用して妊娠した割合も高い傾向があることが示された。この研究結果から、NIPTをうけたカップルは、産後のメンタルストレスを上昇させる背景をもつ傾向があることが予測された。さらにこの検討で明らかとなった背景は、双胎妊娠の発生率を上昇させる因子であるため、今後双胎妊娠でのNIPT希望者が増加することが予測された。また双胎妊娠は、「妊娠中」、また子育てが必要となる「産後」いずれも医学的・心理社会的負担となると考えられる。しかしながら、NIPTにおける双胎妊娠でのデータは十分ではない。そこで次に、双胎妊娠でのNIPTの精度とその後の経過について実際の臨床データを示し、遺伝

カウンセリングの際に考慮すべき点を示した。その結果、さらなる検証が必要ではあるが、本研究での実際の臨床データから、NIPTは双胎妊娠でも単胎妊娠と同程度の精度があることが明らかとなった。

これらの結果をふまえ、最後にNIPTを受けた女性における、さらに子育てが必要となる「産後」のメンタルストレスに焦点をあて、産後メンタルストレスが上昇した要因について調査を行った。その結果、妊娠初期にあまりストレスを感じていなくても産後にメンタルストレスが上昇することがあることがわかった。また、初産婦、ART(特に顕微授精)を利用した妊娠、低出生体重児の出産は、産後メンタルストレスを上昇させる要因となることが明らかとなった。これらの結果から導き出された産後メンタルストレスをもつ妊婦を拾い上げるために、遺伝カウンセリングの場が受け皿の一つになりうるかもしれない。また、産後のメンタルストレスに対して関われる職種として認定遺伝カウンセラーの存在も重要である。

認定遺伝カウンセラーは、臨床家としての役割はもちろんのこと、アドボケイターとして、さらに教育者、研究者としての役割もある。「NIPTをうけた女性」を含む産褥期の女性とその家族は、医療機関、地域社会だけでなく、そこに関わる小児科医、産婦人科医、助産師、保健師、精神科医や臨床心理士などの心理職などの多職種や多診療科、世間や社会、福祉に支えられている。その女性を包括的にサポートする職種として、認定遺伝カウンセラーの働きも重要である。それにより「NIPTを受けた妊婦における産後メンタルストレス」に対して、よりよいアプローチをしていくことができる。